

機関リポジトリを 取り巻く諸問題

ミクロな視点から

前田 隼

北海道大学附属図書館

maeda@lib.hokudai.ac.jp



次世代機関リポジトリの構築 にむけて

基盤はある

ユーザーもいる

サポーターもそろった...

いま、ストーリーが必要だ

(次世代リポジトリには機能だけでなくポリシーが必要だ)







これまでやろうとしてできなかったことを、
しっかりとやって成果を出しましょう

Librarians guide, researchers decide.

マクロとミクロ:それぞれの視点(ユーザーとサポーター)

研究者 木を見て森を見ず

図書館職員 森を見て木を見ず



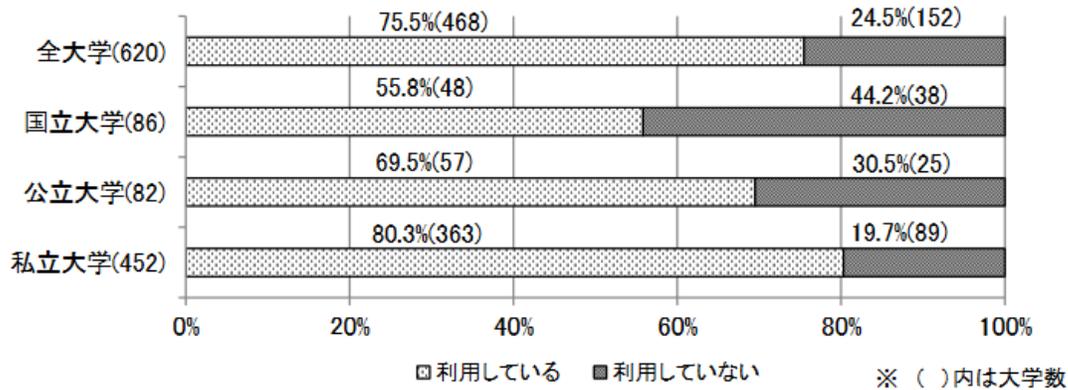
論文数
インパクト・ファクター
被引用数

購読費用の高騰
オープンアクセス
ジャーナルの乱立



日本の状況

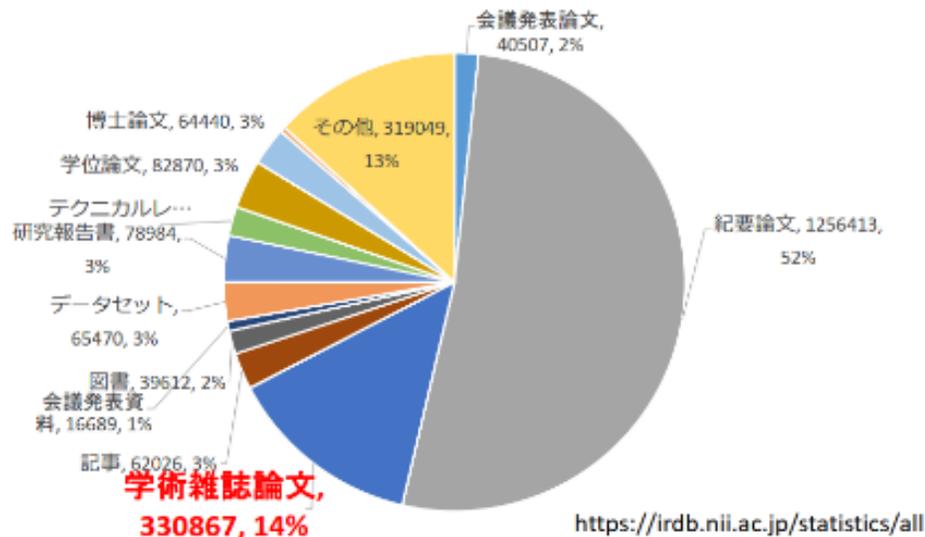
・JAIRO Cloudを利用して機関リポジトリを構築(公開)している大学数(令和2年3月31日現在)



2020学術基盤実態調査

- 620大学/77.4%がリポジトリを持つ
- うち76%がJAIRO Cloud利用機関
- コンテンツ:6割紀要、2割学術論文

機関リポジトリ登録コンテンツの資源タイプ別集計 (2020年4月)



現場はAM(accepted manuscript)やVoR(version of record)の登録で大変

(ここは大学・機関によって温度差がある)



ワークフローの視点からグリーンOAをみる

JPCOARコンテンツ流通促進作業部会 コンテンツ収集班 2019年度の会話

- これから日本のオープンアクセス（OA）はどうするのよ？
海外はゴールドが主流になってきたけど、日本はやっぱりグリーンで行くの？
- そういえば、機関リポジトリ（IR）がどれくらいグリーンOAに利いてるのか、定量的な議論がないな
- だいたいIRはどういったフローで運用されているんだ？
お互いのワークフローの良いところを情報共有したらいいんじゃないか？
- そもそも運用コストはどれくらいなんだろう？
- これらを調べれば、グリーンOAとIRの方向性について議論できるんじゃないか？

JPCOARとは

- 国内のリポジトリ運用機関のコミュニティ
- 強みは800機関もの会員数
 - 課題はコミュニティ機能の強化

コンテンツ流通促進作業部会とは

IRで流通するコンテンツ（論文等）について、どうしたら効率的かつ有益な流通が促進されるか、システム面、ソフト面から多面的に検討する部会。4つの小グループからなる

理工数学系

機関リポジトリの2大負担

- ・ 雑誌本文提供依頼
- ・ ポリシーチェック

IRでの論文の利用状況

方法: 京都大学のIRであるKURENAIのアクセスログ(2017/2/27~2019/9/30)を分析して、IRでの異なるOA種別のあいだのアクセス数の差異を観察

結果: 特に機関リポジトリのみでOAである論文のアクセス数が多い

- ・ 論文のOA版の提供を著者へ依頼する際には、各論文のOA状況を把握しOA版が存在しないものを優先して依頼することが望ましい
- ・ このことは利用者からの需要に応えること、さらには機関リポジトリのプレゼンスの向上につながる

表 8: OA種別ごとの機関リポジトリでのアクセス数の平均と標準偏差。

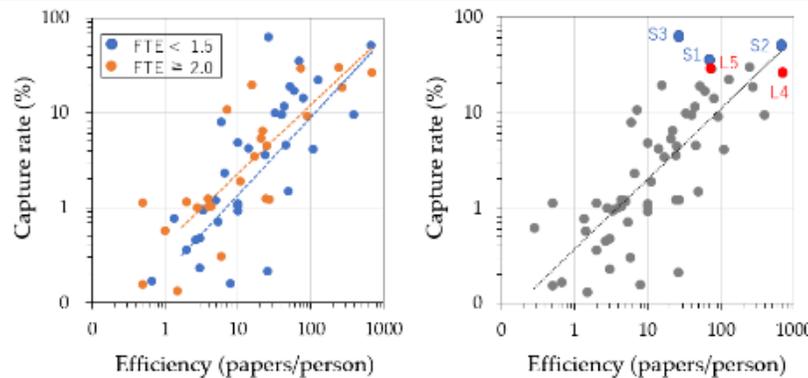
OA 種別	論文件数	アクセス数
全体	8,333	195,122 (105,151)
グリーンOA	3,053	157,741 (103,441)
ハイブリッドOA	585	106,231 (106,412)
ブロンズOA	545	194,086 (182,491)
グリーンOA	4,000	359,090 (179,281)
ブロンズOA	303	157,590 (179,281)
不明	0	—
DOI 有論文・ライセンス付	3,236	159,111 (106,412)
DOI 有論文・ライセンスなし	52	193,330 (169,231)
その他 OA ジャーナル掲載論文・ライセンス付	89	142,677 (116,412)
その他 OA ジャーナル掲載論文・ライセンスなし	216	136,335 (85,812)
リポジトリで OA である論文	4,834	196,011 (114,412)
機関リポジトリで OA である論文	4,351	198,011 (114,412)
機関リポジトリ以外の OA である論文	5,418	179,333 (116,412)
機関リポジトリ以外の OA である論文	5,135	179,777 (116,714)
機関リポジトリ以外の OA である論文 (注: 100% OA ではない論文)	2,379	247,735 (106,714)

西岡 (2020)

17

人文社会系

高い親和性



捕捉率はFTEの大小によらず、扱う論文数と登録の効率化のバランスによる

現実的な処理数は年間100 papers/person くらい一ヒタヒタ路線の落としどころ(限界)はこのあたりあとは機関規模(出版論文数)とのバランス

前田 (2020)

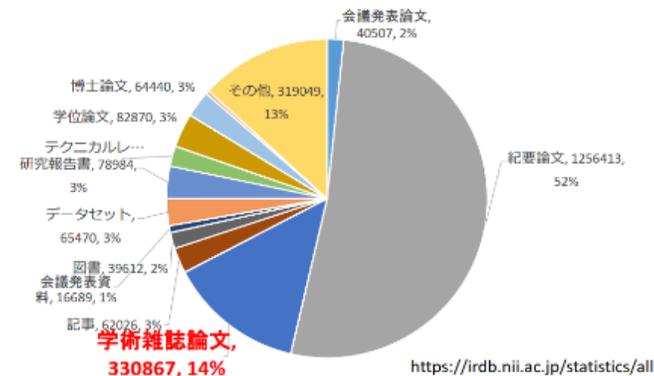
前半のまとめと課題

- ・ グリーンOA推進のための活動としては「学術雑誌論文提供依頼」が有効
- ・ しかし…労力を要する「学術雑誌論文提供依頼」の普及は困難
- ・ 「学術雑誌論文提供依頼」の省力化を可能にするJCのサポート機能が必要

河合 (2020)

日本の状況

機関リポジトリ登録コンテンツの資源タイプ別集計 (2020年4月)



<https://irdb.nii.ac.jp/statistics/all>

14

人文系研究者からの反発

「研究助成金と連動させて、APCに基づくゴールドOAを推進しようというPlan Sモデルは、STEM分野には適切なものかもしれないが、人文科学分野は到底受け入れられない。何故なら、この分野では、助成金によって研究を行うことが一般的ではない。さらに、人文科学分野では、研究者が助成金を獲得する機会が限られているので、グリーンOAや著者以外の機関や団体などが出版費を負担するOAモデルの方が、より適切な選択肢だ。」

Towards a Plan(HS)S: DARIAH's position on Plans[®] DARIAH-EU, 2018-10-25.
<https://www.dariah.eu/2018/10/25/towards-a-planhss-dariahs-position-on-plans/>

尾城 (2020)



日本の機関リポジトリを取り巻く問題

- IRは人文社会学（SSH）に有用（内訳50%以上）な一方、理工系（STEM）への貢献は小さい（内訳14%）
- IRでのみ流通しているコンテンツへのアクセス（需要）が多い（大きい）
- コンテンツ充実には本文提供依頼が最も効果的な一方、最も手間（時間・コスト）がかかっている



- 14%の雑誌論文の登録に多大なコスト（にもかかわらずOA誌や他機関IRとの重複）
 - 現状のコスト（あるいはそれ以下）で価値あるコンテンツ流通へシフト
- 機関ごとにワークフローが異なる。横の情報共有が少ない
 - 効率的ワークフローの模索・共有



次世代リポジトリの運用案

新たな視点の導入

- ・従来の視点：機関リポジトリ（利用される側）から見たコンテンツ（利用する側）
- ・新たな視点：**学術分野（利用する側）から見た機関リポジトリ（利用される側）**
 - STEMから見るとリポジトリってなに？
 - SSHから見るとメジャーになりうるツール

運用ポリシーの見直し

- ・STEM重視からSSH重視へ
(STEMへはオープンアクセスの1手段として残す。本文依頼は限定して行う)
- ・STEM
 - 「価値ある」コンテンツ（IRでのみ公開されている論文＝ほかでは本文が入手できない）へのシフト
- ・従来の個別機関の研究成果のコレクションとしての運用もあり。だがそうすべき理由（研究者総覧との連携・次年度助成金配分への利用など大学としてのマスト）があるかを再考



次世代リポジトリで求められる機能

ワークフローのサポート

- ・ 本文提供依頼の自動化（JAIRO Cloudとの連携強化）
→ その一歩としてコンテンツ登録アシスト機能
- ・ メタデータの自動生成
- ・ 他機関リポジトリとの連携

研究データ公開

- ・ FigShare, Zenodo並みの使いやすさ
- ・ RoV (record of versions) 管理 → 研究活動の一元的管理

多様なコンテンツを簡単に登録する機能・ポリシー

- 文系 preprint、紀要のプラットフォーム
- 理系 純粋グリーンOA
- オンデマンド講義、電子版教科書の保存

次世代機関リポジトリの構築 にむけて

基盤はある

ユーザーもいる

サポーターもそろった...

いま、ストーリーが必要だ

(次世代リポジトリには機能だけでなくポリシーが必要だ)

